

俳句甲子園への入り口 ー俳句入門講座ー

徳島大学総合科学部 教授
堤和博(日本古典文学)

このセミナーは、これから俳句を始めようとする初心者対象の入門講座です。五七五に季語と切れ字が含まれていれば俳句ではあるのですが、特に国語の授業などでは、自分の思いが十七音で読み手に伝わるように纏めましょうなどと指導されたことが、もしかしたらありませんか？あるいは、俳句はそんなふうに詠むものだと思っている人はありませんか？これは初心者ももっともおかしやすい大間違いです。最初に誤解を恐れずに言えば、自分の思いがそっくり読み手に伝わるようでは、俳句ではありません。ではどう詠むのか。そんなことを、俳句成り立ちの歴史を踏まえて講じます。句作の問題を離れても、和歌から連歌・俳諧そして近代俳句へと連なる文学史の勉強となる内容を講じます。

さて、平安時代以降五七五七七の三十一文字の形がほとんどとなった和歌は、技巧面でも六朝的倚傍表現という漢詩の影響を受けたもので確立します。掛詞や擬人法などがそれにあたります。また、詠む題材や詠み方も固定します。例えば、桜・梅などは盛んに詠まれますが、奈良時代には詠まれた椿などは実景では詠まれなくなります。あるいは蛙が詠まれる際には「かはづ」という歌語で詠まれ、山城の井手という所で咲く山吹の下で鳴いているのが詠まれるのです。蛙の他の生態や井手の山吹以外の蛙は詠まれません。

そんな和歌から、鎌倉時代に入る頃、連歌が生まれます。連歌は普通十人足らずの人が集まって、五七五の句と七七の句を交互に付けていき、普通百句連ねて完成させるものです。また句が連なるとともに主題が次から次へと転じていきます。例えば、春の句から恋の句、恋の句から旅の句、旅の句から秋の句へというぐあいにです。よって、一句一句を詠む際に、言い切ってはなりません。“余白”を残しておくと言いますが、何を詠んでいるのかどういう場面を詠んでいるのか、何かしら言い切らない部分、どうしても解釈できる部分を残しておくのです。そこを捉えて次の人が、前の句では表現されなかった要素を付け加えるとともに主題を転じていくのです。こんな連歌には、他にも種々の細かい決まりがたくさんあります。例えば最初の句(発句と言います)は季節を詠まなくてはならず(つまり、季語がなくてはならず)、切れ字がなくてはなりません。

ところで、連歌が隆盛を極めたのは室町時代でしたが、連歌が詠む世界は王朝和歌・王朝文学の世界でありました。世は武士の世になり世の中も大きく変化し

ているのですが、文化は王朝のそれを継承模倣しなくてはという風潮があったのです。そんな風潮が破られるのが戦国から安土桃山時代にかけてであります。連歌も、連句や俳諧(の連歌)とか呼ばれるようになり、詠まれる世界も一変します。王朝文学の世界を離れて卑俗な世界を詠んだり言葉遊びに走ったりしたので、では肝腎の文芸的価値はと言うと、この時代大いに損なわれたというのが現在における評価です。

そこから時代は江戸時代に入って平和な元禄の頃になると、庶民文化も台頭してきます。そんな時に俳諧に新しい美意識をもたらしたのが松尾芭蕉でありました。芭蕉は、卑俗で文芸的価値を落とした既存の俳諧に飽き足らず、俳諧の改革を目指します。庶民生活の中からそこに息づく風雅を見だし、それを新しい文芸的価値として俳諧に吹き込んだのです。ここまで辿ってくると、「古池や 蛙飛び込む 水の音」という人口に膾炙した発句の歴史的意義がお分かりになるでしょう。

ところで、芭蕉の“俳句”とよく言いますが、「古池や……」の句は俳諧の発句であり、他の芭蕉の句も独立した俳句ではなくて、俳諧の中の句なのです。では、俳句とは？それは、明治になって正岡子規が、芭蕉に強く感化されながらも、発句を俳諧から独立した一つの文芸として確立したものからを俳句と称するのです。

急いで纏めましょう。独立した文芸である近代俳句も、源は連歌や俳諧の発句にあります。だから季語を詠み切れ字もあるのです。それとともに、“余白”がたいへん大切です。ここを初心者は知りません。知らないままに詠んでも上達はおぼつかないでしょう。では、余白のある俳句を詠むにはどんなところに気をつければいいのか？そんなことも講じますので、高校生諸君なら、俳句甲子園の入り口くらいは見えてくるかもしれません。

総合科学部公開セミナー

第1回：4月28日(金) 18:30~20:00

対象：一般・大学生・高校生 参加費無料

会場：総合科学部1号館南棟3階 第1会議室
事前申込が必要。駐車場の利用可。

詳細：総合科学部 HP

<http://www.tokushima-u.ac.jp/ias/>

申込み・問い合わせ先:

徳島大学総合科学部事務課総務係

TEL:088-656-9779

E-mail: sksounks@tokushima-u.ac.jp